

# 延慶本平家物語の 太白昴星犯合 記事群

楊 夫 高

## 要 旨

本文对延慶版本『平家物語』中的〈太白犯昴〉(天変地妖②④)等预兆性事件的描写手法进行了分析。其中特别是围绕『平家物語』里的历史事件描写手法与『史记』等正史里的历史记载方式的差异进行了探讨。在研究『平家物語』的历史事件描写手法方面本文是一次新的尝试。

已有学者指出延慶版本中的〈太白犯昴〉等历史事件暗示了平家灭亡的命运。笔者认为这些历史事件的作用并不仅仅拘泥于此。通过共同暗示安德帝的不吉利的命运 分别被记载在不同的章节里的〈太白犯昴〉与〈天変地妖②④〉两者相互呼应, 突出了作品的主题思想。在以史为鉴的这一构思上『平家物語』的历史事件描写手法与正史里的历史记载方式仍然极其相似。

キーワード……前兆 歴史叙述 帝王鑑戒 構想

## はじめに

私は『平家物語』に記される天変地異・怪異記事などが将来の重大事件の前兆としての働きをもっていることに注目し、これらの前兆記事が歴史叙述としての平家物語の中で、構想上どのような役割を果たしているかを論じてきた(1)。検討は覚一本からはじまって延慶本に進んできた。

延慶本(勉誠社)の天文異変記述は九箇所である。

- A 治承元年十二月廿四日の〈彗星①〉(巻二・本文篇上 211頁)
- B 治承二年正月一日の〈彗星②〉(巻三・上 217頁)
- C 治承三年十一月七日の大地震記事の中の天変地妖①への言及(巻三・上 297頁)
- D 中国引用記事「燕丹之亡シ事」における〈白虹貫日〉(巻四・上 434頁)
- E 治承四年九月新院の再度の厳島御幸の契機としての天変地妖②(巻五・上 536頁)
- F 養和二年二月二十三日の〈太白昴星犯合〉(巻七・下 6頁)
- G 厳島明神示現の時、太白犯星への言及(巻七・下 23頁)
- H 寿永二年七月木曾側への山門の返牒における天変地妖③への言及(巻七・下 56頁)
- I 安德帝入水にあたって天変地妖④への言及(巻十一・下 408頁)

右にあげた九箇所の天文異変記述はすべてを通して一元的に見ることは出来ない。その中で、

・彗星①、彗星②

・〈太白昴星犯合〉記事群、天変地妖②④

は物語の構想と関っていると思われる。彗星①、彗星②については、拙稿(2)において既に述べたが、本稿は、〈太白昴星犯合〉記事群について論じたい。〈太白昴星犯合〉記事群は、天変地妖②④に関連し合って、物語の展開と関りがあるような前兆的な役割を与えられていると考えられる。

〈太白昴星犯合〉は史実を確認できるもので、平家物語の諸本がこの事を記しているが、物語中では編年体記事として記された上で、物語の展開に関わるような位置を与えられていると考えられる。特に、延慶本における〈太白昴星犯合〉は、〈太白昴星犯合〉という天変現象だけではなく、その後、

① 中国唐代の玄宗の時代に同天変が出現したこと

② 日本、宣化天王の時に同天変が出現したこと

③ 日本、皇極天皇の時「客星入月中」という天変が出現した

たこと

と、三つの引用故事が綴られている。この三つの引用故事はF〈太白昴星犯合〉記事とあわせて、〈太白昴星犯合〉記事群となっている。

延慶本以外の主要伝本として長門本（勉誠出版）、源平盛衰記（早

稲田大学出版部）、四部合戦状本（汲古書院）、屋代本（新典社）、覚一本（小学館）の五本における〈太白昴星犯合〉記事を調べてみると、源平盛衰記を除く四本は、いずれも〈太白昴星犯合〉という天変を記すだけで、これに対する占文の内容もほぼ同じである。源平盛衰記は、〈太白昴星犯合〉記事の後に、延慶本と同じ順序で三つの引用故事を記しているが、「中国唐代の玄宗の時代に同天変が起きたこと」の記述は繁簡の差がはなはだしい。延慶本では玄宗皇帝と楊貴妃の物語が長々と記されているのに対し、源平盛衰記では、

彼の震旦国には、玄宗皇帝の御代に此天変現じて、七日の内に合戦あつて、楊貴妃亡せ給ひしかば、玄宗鳳闕を出でて、蜀山に迷ひ給ひき。

と、ごく簡潔な記述にとどまり、延慶本のような記し方の簡略形とみることが出来る。ここでは、平家物語の書き方に、天変出現の事実とその占文のみを記す伝本と、中国日本の先例を付け加えながら、当代の異変の重大さを一層強調しようとする伝本の、二つの形があることを確認するにとどめたい。

さて、延慶本における〈太白昴星犯合〉記事群は、中国の話を中心に引直し、それを二つの日本の記事で補強するような形で構成されている。玄宗と楊貴妃の物語にかなり紙数をさいていることには、延慶本の独自の構想を想定することが出来るだろう。(3)

また、〈太白昴星犯合〉記事群とはかなり離れた位置にあるものだが、天変地妖②と天変地妖④は、天変の具体的な説明はないが、天変地妖②は安徳帝即位直後の不安定な政局、天変地妖④は安徳帝の運命に関わるものとして書かれている。これまで、楊貴妃関係の記事および役行者関係の記事には、主に「当代批判」という観点で検討がなされているが、天変記事を重視したものではなかった。私見によれば、楊貴妃関係記事等を含む〈太白昴星犯合〉記事群は前兆的な役割がもたされているのであり、離れた位置にある天変地妖記事は、F〈太白昴星犯合〉記事群が暗示する内容と呼応しているのである。

本稿は、この三つの天変記事はどのように前兆的な役割を果し、構想とかがわっているのかについて、検討する。

## 一、 太白昴星犯合 について

まず、巻七に記される養和二年（一一八二）の〈太白昴星犯合〉の記述位置と記述内容を確認する。

巻七の冒頭部の「踏歌節会」という章段において、宗盛が「先帝御忌月」（高倉天皇が前年の治承五年正月になくなったことをさす）という理由で、正月一日の節会も十六日の踏歌節会も中止させ（4）、この年以降も永久に行わないのだと言う。人々は、長く天皇の行うべき宮中の年中行事として続いてきたものを勝手に停止させるとは、「平家ノ一門ノ過分ナルシワザ」と、

王権に対する平家一門の専横悪行だと批判する。こうした平家一門に対する批判的な記述を承けて、次の章段「太白昴星事付楊貴妃被失事並役行者事」（5）において、〈太白昴星犯合〉が記される。〈太白昴星犯合〉記事を前後の記述とあわせて抜き出してみる。

（養和二年）正月一日、依諒闇不被行節会。十六日、踏歌節会モナシ。〔為先帝御忌月之上ハ、永可被止〕トゾ、宗盛計申ケル。…代々ノ聖主懈リ給ワズ。仁王四十二代ノ節会也。殿上ニハ數百年ノ嘉例也。然ヲ依御忌月被止トハ云ナガラ、是併ラ平家ノ一門ノ過分ナルシワザトゾササヤキケル。（巻七 踏歌節会）

〔三〕

（養和二年）二月廿三日ノ夜半ニ、犯大伯昴星。是旁以重変ナリ。天文要録云、「大伯（6）昴星ハ、大將軍失国ノ境ヲ、四夷来、有兵起事」ト云ヘリ。世ハ只今乱ナムズトテ、天下ノ歎ニテゾ有ケル。

〔七〕

彼辰旦国ニハ、玄宗皇帝ノ御宇仁此天変現シテ、七日内ニ天下乱キ。其由来ヲ尋レバ、玄宗皇帝、弘農ノ陽玄琰ガ女、陽貴妃ヲ求得テ、朝夕愛シ給ヒキ。…依之、陽貴妃ノ兄陽国忠、盜丞相位、愚ニ弄国柄。此事ヲ安禄山ト云シ人強ニ妬テ…（以下、安禄山の謀反によって楊貴妃・楊国忠が死ぬこと、楊貴妃を忘れられぬ玄宗が方士の術によって楊貴妃と一回再会を果たしてから死ぬことを記す）…此事ヲ思ニモ平家ノ一門ハ皆建礼門院ノ御故ニ、丞相ノ位ヲケガシ、国

柄ノ政ヲ掌ドル。悪事既ニ超過セリ。行末モ今ハアヤフガル。天変ノ現シ様恐シトゾ。

+

御朝ニモ廿九代御門宣化天王ノ御代ニ、此天変アリテ、六和金村、蘇我稻目ナムド云シ臣下等、面々ニ巧ヲタテ、天下ヲ乱リ、帝位ヲウバイシ事、廿余年也。

+

皇極天皇ノ御時ハ、元年七月ニ、客星入ル月中ト云天変アリキ。迺臣五位ニ至ルト云事ナルベシ。

+

其時ハ役ノ行者ニ仰セテ、七日七夜祈ラセ給タリケレバ、兵乱ヲ転ジテ百日ノ旱魃ニゾナリニケル。王位ハ恙マシマザリケレドモ、五穀皆損テ、上下飢ニノゾミケルトカヤ。今ハ役ノ行者モナケレバ、誰カ此ヲ転ズベキ。待池ノ魚ノ風情ニテ、災ノ起ラム事ヲ、今ヤくト待居タルゾココロウキ。

（巻七 太白昴星事付楊貴妃被失事並役行者事）

右の引用で確認したように、「平家ノ一門ノ過分ナルシワザ」という平家一門を批判する記述を承けて、「太白昴星犯合」が記される。まずは、二月廿三日ノ夜半ニ、犯大伯昴星。是旁以重変ナリ。」と、「重変」と記すのみで具体的な予告はない。しかし、次に『天文要録』の占文「大將軍失国境、四夷来、有兵起事」を引用し、「世ハ只今乱ナムズ」と人々の反応を記す。

『天文要録』の占文が「重変」の具体的な内容だとみれば、（都の）大將軍が、（国の境の守備について）その守りを保持できなくなり、（国の）四周の蛮族が（都に）攻めてきて、都の軍隊と四夷との兵乱が起こる、ということだろう。

平家物語のこの天変記述は、『玉葉』の養和二年（一一八二）二月二十三日の条に、「太白昴星犯合」の記述が見られ、史実をもとにしたものと分かる（7）。

午刻、泰親朝臣来：此間、金星欲犯昴宿、若如存犯之者、殊勝大事之變也、仍兼所申也、占文不快云々

と、金星が昴宿に接近していること、もし犯すことになった場合は、大変な凶兆になるので、あらかじめ兼実知らせてきたのだという。具体的にどのようなことが予測されたのかは不明だが、不吉な予測があったようである（8）。

〈太白昴星犯合〉がもともとのような事変の先触れと考えられていたのかについて、次に確認しておこう。

### 1、太白昴星犯合 の意味

まず、平家物語の引用の典拠『天文要録』（9）を確認してみる。但し本来あれば情報を得ることができたであろう「太白占第九」は、現在失われているため、「昴占第廿八」しか確認できなかった

た。「昴占第廿八」には、「太白昴星犯合」を

不出其年国有変臣迫逐君

大將軍失国堺不出五年

大人(10) 當之兵起期三年

などと、いずれも「不出其年」、「不出五年」「期三年」と、事件の起こる時間を限定して示しながら、「臣が君を追い出す」や、「大將軍が国境の守りを保持できなくなる」ことや、「大臣が反乱に對抗する」というような国家的な大變事につながるものと解釈している。右の三つの古文の中の「大將軍失国堺」は、平家物語の引用する古文の一部と同じである。ただし、物語には事件の起こる時間的範囲に関する言及がない。

次に、『史記』天官書、『漢書』『後漢書』『晋書』(11)それぞれ

の天文志に記される(太白昴星犯合)の記述を確認してみる。

まず、「太白」「昴星」それぞれの意味について注目してみた。

「太白」は「司兵」(『史記』)

「兵象也」(『漢書』)

「太白進退以候兵」(『晋書』)

「大臣也」(『史記』『晋書』)

「昴星」は「胡星也」(『史記』『漢書』)

「為邊兵」(『史記』『漢書』『晋書』)

と解釈される(12)。「太白」は、「兵を司る」、「兵の象徴」、「太白の進退を以って兵を伺う」などと解釈され、「軍事を司る」のたと位置付けられている(13)。また、「太白」は「大臣」とも解釈され、この解釈から考えれば、「太白」は大臣、すなわち朝廷・都側を指し、「昴星」は蛮夷側・辺境側、すなわち地方の軍事的勢力を指すのが基本的なとらえ方と考えられる。このことから予想される両者の「犯合」は、朝廷と地方の対立抗争、天皇に対する在地勢力の反抗ということになるだろう。

続いて右に挙げた中国正史の中から(太白昴星犯合)記事を拾いだしてみる。

『史記』天官書は、「太白昴星犯合」の記述がない。

『漢書』天文志は、「太白入昴」(孝昭始元(前八六)前八一)と、一回記録されているが、その意味は記されていない。

『後漢書』・天文志においては、「太白昴星犯合」が三例記されている。それは

a 孝章建初元年(七六年)、正月丁巳、太白在昴西一尺。太白在

昴為邊兵。

b 延光三年(一二四年)二月辛未、太白犯昴。

c (延光三年)十一月、太白犯昴、畢、為邊兵、一曰大人當之。

である。

この三つの天変記事において、aは「邊兵」、cは「邊兵」、あるいは「大人當之（大臣が抵抗する）」と記される。また、bの本文に解釈はないが、その注に、

石氏星占：「太白守昴、兵從門闕入、主人走。」欽明曰：「不有亡国、必有謀主。」又云：「入昴、大赦」

と記している。〈太白昴星犯合〉は、「兵、門闕より入り、主人走る」「国を亡ぼすこと有らずは、必ず主を謀ること有り」と、都の外から、即ち「邊兵」のような兵乱が起こり、君主が逃げ出し、命が危うくなる、国を亡ぼすことがあるか、そうでなければ、必ず君主に悪事をたくらむことがあるという。

『後漢書』天文志において、a b cはいずれも「邊兵」、都の外からの兵乱だというのである。

『晋書』天文志には、〈太白昴星犯合〉が八回記される。

- d 惠帝永康三年（二九三年）、**填星、歳星、太白三星聚畢昴**。占曰「**為兵喪。畢昴、趙地也。**」後賈后陥殺太子、趙王廢后、又殺之、斬張華、裴頠、遂篡位、廢帝為太上皇、天下從此遭亂連禍。
- e 太安二年（三〇二年）二月、**太白入昴**。占曰「**天下擾、兵大起**」
- f 咸康元年（三三五年）二月己亥、**太白犯昴**。占曰「**兵起、歳中旱**。」四月、石季龍略騎至歷陽、加司徒王導大司馬、治兵列成衝要。是時、石季龍又圍襄陽。六月旱。

g 康帝建元元年（三四三年）正月壬午、**太白入昴**。占曰「**趙地有兵**。」又曰「**天下兵起**。」四月乙酉、太白晝見。是年、石季龍殺其子邃、又遣將寇没狄道、及屯蘇東、謀慕容皝。

h 穆帝永和四年（三四八年）四月**太白入昴**。是時、戎晋相侵、趙地連兵尤甚。

i 穆帝永和七年（三五一年）二月、**太白犯昴**。占同上（「**大臣有誅**」のこと）。

j 海西太和二年（三六七年）正月、**太白入昴**。五年、慕容暉為苻堅所滅、又據司、冀、幽、并四州。

k (太元) 十年（三八五年）四月乙亥、(太白)又晝見于畢昴。占曰「**魏国有兵喪**」。是時苻堅大衆奔潰、趙魏連兵相攻、堅為姚萇所殺。

『晋書』天文志における天変の書き方を、大まかにまとめると、**天変の顛れ方** ↓ **占文** ↓ **後に実現した歴史事件**

のパターンで記されている。この八回の天変記事において、占文には、「兵喪」、「兵起」、「有兵」と記され、軍事的な大事件が予告される。そして、その後に実際に起こった事件は

- d は、「皇位相続」をめぐる西晋の皇室内の紛争である。
- e は、実際の事件が記されていない。
- f は、後趙皇帝石季龍が兵を以て勢力を拡大すること。
- g は、後趙皇帝石季龍が太子である息子を殺し、蛮夷を攻めること。

hは、戎と晋は戦い、後趙は兵乱となること。

iは、実際の事件が記されていない。

jは、前秦皇帝苻堅が慕容暉を滅ぼし、司冀幽等を併呑すること。

kは、前秦皇帝苻堅が滅ぼされる事件である。

と、いずれも皇帝、皇室に関わる「兵乱」であった。

『史記』などの正史や『天文要録』の捉え方と、平家物語が引用する「天文要録」の占文とをあわせてみると、〈太白昴星犯合〉という天変は、都の秩序が乱れ、君主が都を離れ、国が滅ぶような「兵乱」の勃発を予兆するという点で一致しているといえよう。

日本では、養和二年以前は、一回だけ〈太白昴星犯合〉が観察されたようである<sup>(14)</sup>。それは、『日本紀略』<sup>(15)</sup>寛平五年(八九三年)五月二十九日の条「廿九日戊戌。日入時。太白失度。守昴星北旁」である。この現象に対する占文が付されていないのは残念である。

## 2、延慶本の 太白昴星犯合 の予兆すること

〈太白昴星犯合〉が国家の体制、帝王の安泰に関わる重大事件を予告するものだということを確認したのだが、日本でも実際の観測例がきわめて少ない天変を、平家物語が取り上げていることの意味は重い。前にも述べたことがあるが<sup>(16)</sup>、この時代にはほ

かにも天変がたくさん観測されているのだが、平家物語はそれらの中から取捨選択・厳選していることが認められる。この〈太白昴星犯合〉を記していることも、その後の重大な出来事を予兆しようという意図があつたことなのである。

そこで、平家物語の引用する「天文要録」の占文「大將軍失国境、四夷来」の実現とみることでできそうな事件を、延慶本のこの先の記述の中から探ってみることにする。

「大將軍」は「中央の権力を軍事的に具象化した存在」、「四夷」は「中央の権威に対する地方の反抗勢力」だと考えられる。物語に当てはめて養和二年二月の〈太白昴星犯合〉の記事の後の物語の展開をみると、同の巻七の「為木曾追討軍兵向北国事」において平家と木曾との合戦が始まり、「平家都落ル事」において、木曾軍が都へ攻め込み、平家一門が安徳帝とともに都落ちする。「大將軍」が中央(都)の権力を象徴するものだと考えれば、帝と置き換えてみることもできるだろうが、それを前提にすれば、木曾が地方からの侵攻勢力「四夷」の一つだと考えると、「天文要録」の占文と合うことになる。これによれば、〈太白昴星犯合〉記事及びその占文は、まずは、延慶本の巻七の末までを見通して、史実に基づきながら改めて物語中に配置された天変記事だということができよう。

### 二、 太白昴星犯合 記事群の引用故事について

## 1、「楊貴妃被失事」について

天変の予告について検討を加えたが、さらに、〈太白昴星犯合〉記事の後に「楊貴妃被失事」が記されることの意味を考へる。

延慶本は、「玄宗皇帝ノ御宇仁此天変現ジテ、七日内ニ天下乱キ」と、玄宗皇帝治世中に〈太白昴星犯合〉が起こり、そののち七日以内に天下が乱れたと回想する。それほど切迫、それほど重大な事件勃発を予兆する天変であったのだというのである。その「天下乱キ」というのは、安祿山の反乱を指しているので、史実としてあるいは中国の物語としてその直前に〈太白昴星犯合〉が起きていたのかどうかを確認してみた。

『旧唐書』(17)の「本紀玄宗」「天文志」、『新唐書』(18)の「本紀玄宗」「天文志」、『長恨歌傳』、『楊太真外傳』(19)を確認したが、安祿山の反乱の直前に、〈太白昴星犯合〉は勿論のこと、ほかの天変でも出現したことを確認できなかった。したがって、「玄宗皇帝ノ御宇仁此天変現ジテ、七日内ニ天下乱キ」という記述は、延慶本の虚構である可能性が高い(20)。どうして、虚構までして「楊貴妃被失事」の記事を取り入れたのだろうか。「楊貴妃被失事」と養和二年の〈太白昴星犯合〉とどのように関わっているのか。その次の本文から探ってみる。

物語は、「其由来ヲ尋レバ」と詳細な喩え話になって、楊貴

妃と玄宗との夫婦の鐘愛、愛別離苦の悲恋物語が綿々と記されるが、結末においては、楊家楊国忠の批判に転じて、その批判は平家一門の専横への批判と重なる形で終る。悲恋物語は物語として情趣深く伝え、そこに語り手の批判意識は感じられないが、「物語」が終ると、批判的な見地が強く出されて結ばれるのである。

このような延慶本の叙述について、先行研究(21)がある。

武久堅は、中心部の楊貴妃の悲恋物語は、『長恨歌』と『長恨歌伝』に依拠して構成されると指摘し、基本的には平家一族の専横批判を意図して編入されていると述べる(22)。

牧野和夫は、武久論をふまえながら、さらに批判のあり方を細かく検討し、「延慶本『平家物語』は、主に『長恨歌伝』に拠った「付楊貴妃被失事」を設け、楊貴妃を後白河院の子高倉帝の妃建礼門院に、兄楊国忠を宗盛等に配し、暗示的に玄宗を後白河院に比することによって、養和二年前後の宮廷政治(院政)と、『長恨歌伝』に展開する玄宗の御代(天宝ノ末)の宮廷政治と重ね合わせにして、以て院の政治を痛切に批判した」と指摘し、「楊貴妃被失事」は、後白河院批判に繋がっていくと述べている(23)。

私は、右の二氏による見解(平家一門の専横批判)に同意するが、それと合わせて、「楊貴妃被失事」の終わりに、「此事ヲ思ニモ平家ノ一門ハ皆建礼門院ノ御故ニ、丞相ノ位ヲケガシ、国柄ノ政ヲ掌ドル。悪事既ニ超過セリ。行末モ今ハアヤフガル。



「天変ノ現ジ様恐シトゾ。」と記されていることに注目したい。全体としてこの楊貴妃関係記事の引用は、二段構えの批判と考えるのである。楊貴妃の悲恋物語を通しての批判は、後白河院等の当代政界に向けられていることは確かであるが、この話を包む全体の大枠は平家の将来に対する危惧になっていると考えるのである。

楊貴妃の悲恋物語の引用において、平家一族の専横に対する批判が、次の記述における楊国忠・平家一門に対する記述の対比からもうかがえる。

次の表に示したように、

依之、 <b>陽貴妃ノ兄陽国忠</b>	=	<b>平家ノ一門ハ皆 建礼門院ノ御故ニ</b>
<b>盜丞相位</b>	=	<b>丞相ノ位 ヲケガシ</b>
<b>愚ニ弄国柄</b>	=	<b>国柄ノ政 ヲ掌ドル</b>

\*

悪事既ニ超過セリ。行末モ今ハアヤフガル。天変ノ現ジ様恐シ

平家に対する批判は楊家への批判と酷似している。建礼門院を楊貴妃に喩え、平家一門を楊国忠に喩えて平家の横暴を批判し

ている。しかし、この物語の記述の時点に近い政治状況に対する批判だけでは終わらない。次の記述をみると、「悪事既ニ超過セリ。行末モ今ハアヤフガル。天変ノ現ジ様恐シトゾ」と、平家一門の今後の「行末」と「天変ノ現ジ様恐シトゾ」と記しているのは、平家のその先の行方へと射程をのぼし、平家の横暴を批判すると同時に、楊家一族の滅びを通して、結果的に平家一族が滅亡する運命にあることを予兆していると考えられる。

## 2、日本の二つの引用故事と役行者伝

「楊貴妃被失事」の最後は、「悪事既ニ超過セリ。行末モ今ハアヤフガル」と、平家一門の「行末」をほのめかして、「天変ノ現ジ様恐シトゾ」という記述でまとめる。これらの記述を承けて、日本の過去を振り返って二つの引用故事が続いて、役行者の話(24)に入る。

「宣化天王ノ御代」には、「太白昴星犯合」という天変があらわれ、「皇極天皇ノ御時」には、「客星入月中」という天変だったが、「其時ハ役ノ行者ニ仰セテ」、「兵乱ヲ転ジテ百日ノ早魃ニゾナリニケル」と、兵乱の実現を早魃に転換させて避けることが出来たという。「今ハ役ノ行者モナケレバ」と、今(すなわち平家全盛時代の今)は役行者がいけないので、「誰カ此ヲ転ズベキ」と、兵乱の実現を避けることが出来ないのだという。「待池

ノ魚ノ風情ニテ、災ノ起ラム事」と、水がなくなっていく池の魚が運命に身をまかせざるばかりでなす術がないように、災の到来が確実でありながら、それに対する策を講ずることが出来なまま、ただただ恐怖において待たねばならぬ状態であると記している。

「宣化天王ノ御代（五三五〜五三九年）」、「皇極天皇ノ御時（六四二〜六四五年）」の二つの天変は、平家物語の時代からみれば、遙かに時間の隔たった過去のことであるが、延慶本がここにこの二つの記事を挿入したのは、単に類似の先例を想起して追加したというより、平家の物語の展開にも関わらせようとしたのではなからうか。私は、この二つの天変が、このさきの事件に対し暗示するものがないかどうかを、本文の中から探ってみたいと思う。

（イ）「宣化天王ノ御代」の時の天変は〈太白昴星犯合〉であり、「天下ヲ乱リ、帝位ヲウバイシ」という結果だったという。『日本書紀』<sup>(25)</sup>によれば、宣化天皇の時に、〈太白昴星犯合〉の記録はなく、「天下ヲ乱リ、帝位ヲウバイシ」に相当する記述はなかった。

先例の根拠を確かめることは出来なかったが、平家物語の現実に関わるものとして、「先例」としての機能がもたされているのかどうか、物語の中で限定的に考えてもよからう。「天下ヲ乱リ、帝位ヲウバイシ」という先例の結果に基づいて、平家物語

の後の展開を見ると、寿永二年七月廿四日に安徳帝が平家とともに都落ちしてから、一ヶ月も経たない内に、「四宮踐祚有事付義仲行家ニ勲功ヲ給事」（巻八）において、

同（寿永二年八月）廿日、法住寺ノ新御所ニテ、高倉院第四王子踐祚アリ。

という記述が見られる。生形貴重は、平家物語が安徳天皇の廢帝物語<sup>(26)</sup>としての構想を持っていると指摘し、『平家物語』巻八は高倉院第四宮の即位決定・平氏一門解官の事、即ち廢帝記事から語りだされる<sup>(27)</sup>と述べている。生形の指摘に従えば、「四宮踐祚有事付義仲行家ニ勲功ヲ給事」の記事をもって、安徳帝は「廢帝」になったのである。平家物語の中では、巻六以降では、強権発動による皇位更迭は、この一件のみである。従って、宣化天王の時の天変だという形で引用された記事は、平家とともに都落ちした安徳帝の帝位が奪われてしまうことを指していると考えられる。

（ロ）「皇極天皇ノ御時」の天変は〈太白昴星犯合〉ではなく、「客星入月中」<sup>(28)</sup>という天変である。この天変を「逆臣五位ニ至ル」と解釈している。『日本書紀』によれば、元年（六四二年）七月に「客星入月中」という天変の記述が確認できる。しかし、「逆臣五位ニ至ル」に相当する記述はない。「役ノ行者」の「七

日七夜」の祈禱により、兵乱を早魃に変えたという記述も確認できなかった。前項と同様に、ここでも引かれた先例の実態をほとんど確かめることができなかったが、物語の構想が生み出した「先例」としてみることにする。

平家物語のこの時点での「逆臣」とは一体誰を指しているのだろうか。巻七〈太白昴星犯合〉が記された時点は安徳帝在位中であるから、「逆臣」というのは、安徳帝に対するものと考えるのが穏当であろう。そうすれば、この時点で、中央政界の臣下でありながら反抗的な行動をしたものは物語に描かれていない。「朝敵」(29)という形で「逆臣」ならば、頼朝、義仲、行家などの源氏側を指すことにはなる。

## まとめ

史実をふまえて記されたと思われる〈太白昴星犯合〉だが、占文の示す不気味な予告や楊貴妃の話をはじめとする三つの震旦・本朝の先例を付け加えることで、物語上重要なメッセージが託されていると考えられる。しかし、三つの引用故事の天変は、「皇極天皇ノ御時」の「客星入月中」という天変を除けば、正史において確認できなかった。この三つの引用故事は、すべての記事の意図を明確に出来たわけではないが、延慶本の構想に基づいて取り入れられたと考えられる。

それぞれの「天変」をそののちの物語の「事例」の中から解釈

してみたが、それらを〈太白昴星犯合〉記事群の意味するものとしてまとめる。

イ、養和二年(一一八二年)二月の〈太白昴星犯合〉は、翌年の寿永二年(一一八三年)の

①木曾軍の都への侵攻、  
②安徳帝、平家一門の都落ち、  
を暗示していると考えられる。

さらに、□、「楊貴妃被失事」の記述を通して、

③当代の平家を批判し、

④平家一門の将来の滅亡を暗示し、

□、宣化天王の時の天変を引き合いにだす事に拠って、平家とともに都落ちする

⑤安徳帝の帝位が奪われてしまうこと

を指し、皇極天皇の時の天変の引用は

⑥頼朝、義仲、行家などの清和源氏側の台頭

を予兆すると考えられる。

〈太白昴星犯合〉記事群における天変は、物語の後半部分の大きな行方を暗示し、帝王である安徳帝に焦点を当てながらも平家一族の滅亡と源氏側の台頭という物語の後半の枠組みに基づいて記されていると考えられるのである。

ところで、「天変地妖」②と④は、〈太白昴星犯合〉記事群と密着した位置にはないが、物語の展開上、同じような役割で置かれ

た異変記事だと考えられる。次節において、そのことを検証する。

### 三、天変地妖 について

まず、巻五の「天変地妖②」について確認しておこう。「新院  
殿島へ御幸事付願文アソバス事」において、「天変地妖②」は、  
治承四年（一一八〇）九月の新院（高倉院）の再度の殿島御幸  
の契機となった変異として記されている。

同（治承四年）九月廿二日、新院又殿島へ御幸。去三月ニモ御幸  
アリテ、其驗ニヤ、一両月程ニ天下鎮タル様ニミヘテ、法皇モ鳥  
羽殿ヨリ出御ナドアリシニ、去五月、高倉宮ノ御事ヨリ打連キ、  
又シヅマリモヤラズ。天変頻ニ示シ、地天（30）常ニア（ツ）テ、  
朝廷不穩カラシカバ、惣ハ天下静謐ノ御祈念、別テハ聖牀不予ノ  
御祈禱ノ為也。

（巻五 新院殿島へ御幸事付願文アソバス事）

高倉院は、退位後二度しかも一年のうちに二度も、殿島へ御  
幸があった。三月の御幸は、世の中に平穩をもたらしたが、ま  
もなく天下の騒動となったので、再度行われたのだという。二  
度目の御幸を決意させたもののうち、「天変地妖」のさとしがあ  
ったことが大きかったという。

巻五に位置する新院高倉院の殿島御幸記事の前には、高倉  
宮・頼政謀反の鎮圧、平家による都遷、頼朝の挙兵記事群など  
の全国的な混乱状況が記される。その前後の記事構成を章段名  
で把握しておく。

#### 巻四

高倉宮都ヲ落坐事（高倉宮以仁王・頼政の謀反の露見から討死まで）

：

#### 都遷事

#### 巻五

兵衛佐頼朝発謀叛由来事

：

石橋山合戦事

小壺坂合戦之事

衣笠城合戦之事

：

惟盛以下東国へ向事

：

新院殿島へ御幸事付願文アソバス事

同（治承四年）九月廿二日、新院又殿島へ御幸。去三月ニモ  
御幸アリテ、其驗ニヤ、一両月程ニ天下鎮タル様ニミヘテ、  
法皇モ鳥羽殿ヨリ出御ナドアリシニ、去五月、高倉宮ノ御事  
ヨリ打連キ、又シヅマリモヤラズ。天変頻ニ示シ、地天常ニ

ア(ツ)テ、朝廷不穩カラシカバ、惣ハ天下静謐ノ御祈念、別テハ聖跡不予ノ御祈禱ノ為也。

(巻五 新院厳島へ御幸事付願文アソバス事)

右の概括に示したとおり、高倉宮・頼政謀反の鎮圧、平家による都遷、頼朝の挙兵及びその由来、石橋山合戦、小壺坂合戦、衣笠城合戦などの頼朝挙兵諸合戦、及び頼朝追討使・惟盛の東国発向等の記事を承けて、新院の厳島御幸が記される。

治承四年三月の最初の厳島御幸は、後白河法皇の幽閉解除という成果をもたらしたが、五月の以仁王の挙兵事件以降また世の中が収まらず、天変地妖が続いたというのであろう。そうすると、治承四年五月の高倉宮の謀反の前後から、九月廿二日に新院の厳島御幸に至るまでの約五ヶ月の間に天変地妖が連続して出現したということになる。ところが、平家物語が記すその期間は巻四に相当するのだが、そこに天変地妖は具体的に記されていない。『玉葉』『山槐記』『百鍊抄』等の記録類を見ると、

治承四年四月廿三日の条に「地震」『玉葉』『百鍊抄』

治承四年四月廿九日の条に「辻風」『玉葉』『山槐記』『百鍊抄』

治承四年五月十二日の条に「早魃」『玉葉』『百鍊抄』

治承四年七月十九日の条に「大流星」『百鍊抄』

と、天変地妖の連続発生したことが確認できる。しかし、これ

らの記録類には、この異変が何を予兆するのかわかるという事は書かれていない。

平家物語は物語中に細かく記述はしなかったが、史実に基づいて、新院の厳島御幸の理由として、語り手の回想の形でこの間の異変を集約して、「天変地妖②」として記していると考えることができる。

さて、三月に高倉院が厳島御幸をして、一二月天下が平靜になったが、五月の高倉宮の謀反から「又シヅマリモヤラズ」、天変地妖が多発して、「朝廷不穩」という。「朝廷不穩」とは一体どのようなことだったのだろうか。物語に記される五月からの記事をもう一度振り返ってみると、まず

- ・ 以仁王の挙兵と死、
- ・ 頼政の死、
- ・ 平家による都遷、
- ・ 頼朝挙兵合戦記事群、
- ・ 惟盛の東国発向、

などの頼朝挙兵・謀反に関わる諸記事が記されている。いずれも中央政権の存亡に関わる事件であり、すなわち王権に関わる重大事件であった。

したがって、「天変地妖②」は、安徳帝の即位直後にいわば同時並行的に重大事件が起こるのだが、これが、王権に関わるも

のとして警告したのであり、それにより、「朝廷不穩」となったのである。

以上が、まずは延慶本が記そうとした大筋（構想）であると考えられる。しかし、延慶本は、その構想を徹底して貫くまでには至らなかったようである。それは、高倉院の厳島願文の内実によつてうかがわれる。

願文本文の引用は省略するが、新院の願文をみると、記されていることは、

・まず厳嶋の神を称える文言であり、  
 ・続いて厳嶋の神に額づく自ら（新院）の心であり、  
 祈願の主旨は

・自らの病気の平癒であり、  
 ・仏教的な救済に与ろうとする願いである。

遷都と謀反などに懸念して祈念することはどこにも触れられていない。いわば、「願文」が実際に書かれたもの（本当に実物は問題があるが、一応表向きには）「願文の実物」として、延慶本が作品中に取り入れるに当たって、その文言を、物語の構想にあわせて「改変」することをしなかつたのである。地の文と「願文」との乖離は、かえって延慶本の地の文の意図をあらわにしているのではなからうか。

天変地妖を主たる要因として、新院の厳島御幸があったのだと書いたのは、第一に朝廷（王権）の危機感によるものだった

のであり、高倉院自身の健康不安は二番目にさげられたのであった。それは遷都をさせた平家への批判、及び反平家の動きが活発化しているという政情不安の流れの中に位置づけようとする意図によると考えられるのである。

#### 四 天変地妖 について

次に、「天変地妖④」を検討する。

安徳帝入水後、安徳帝の短く不吉な一生を回想する中に記されるのが、「天変地妖④」である。

抑此帝ヲバ安徳帝ト申ス。受禪ノ日、様々ノ怪異在ケリ。昼ノ御座ノ御茵ノ縁ニ犬ノケガシラシ、夜ノ御殿ノ御帳ノ内ニ山鳩入籠リ、御即位ノ日、高御座ノ後ニ女房頓ニ絶入、御禊ノ日、百子ノ帳ノ前ニ夫男上居リ。御在位三ヶ年之間、天変地妖打連テ、諸社諸寺ヨリ怪ヲ奏ル事頻也。春夏ハ旱魃、洪水、秋冬ハ大風、蝗損。……（続いて異常天候、自然災害等の記事）

（卷十一 安徳天皇事付生虜共京上事）

ここでは、安徳帝の「受禪ノ日」「御即位ノ日」「御禊ノ日」に、いずれも様々な怪異<sup>31</sup>があったと記し、これらの記事を受けて、「御在位」中は、「天変地妖打連テ」、「諸社諸寺」がしきりに「怪異」を奏したほど、天も地も神も仏も、この天皇が

不吉な運命を背負って生まれた<sup>(32)</sup>のだという。平家物語において、安徳帝は不吉の帝であり、「天変地妖④」は、そもそも安徳帝は天が認めない天皇として誕生したのだということを示すために記されている。平家一門にとっては、都落ちしたとはいえ、表向きは西国への「行幸」であるから、安徳帝は依然として在位中であり、在位期間は、安徳帝入水の寿永三年までと考えば、五年あまりの在位となるはずである。ところが、延慶本は、「御在位三ヶ年之間」と記している。「三ヶ年」という安徳帝の在位期間の数え方は、四の宮が即位した寿永二年七月廿四日によってうちきられたものである。この数え方は都中心のものであることは明らかである。三年間の天変地妖とは、すなわち治承四年(一一八〇)二月二十一日から寿永二年(一一八三)三月二十四日までの三年間に起こった天変地妖を指すことになる。この三年間とは、これまで本稿で検討してきた二つの異変を含む期間である。すなわち、延慶本は、〈天変地妖②〉で一回警告予兆し、次に、いっそう具体的な天変出現として〈太白昴星犯合〉が記されていたと考えることができるのである。

天変地妖②(巻五)



治承四年、安徳帝即位直後の「朝廷不穩」



〈太白星昴犯合〉(巻七)



平家一族の滅亡と安徳帝の帝位が奪われること



天変地妖④(巻十一)



安徳帝の不吉な運命をめぐ  
る回想記事

「天変地妖②」は、安徳帝即位直後の「朝廷不穩」、即ち以仁王・頼政の謀反、平家の意志による遷都、源平合戦の始まり・頼朝の挙兵」を解釈し、〈太白昴星犯合〉記事群は平家一族の滅亡と源氏の台頭、及び安徳帝の帝位が奪われることを暗示する。また「天変地妖④」において、「天変地妖②」と〈太白昴星犯合〉という天変を振り返って安徳帝の不幸な運命を解釈している。

### おわりに

これまでの検討をまとめる。

〈太白昴星犯合〉記事群、天変地妖②④は、離れた位置にあるものの、呼応して繋がっていると考えられる。これらをつなぐもの(構想)は、安徳帝の滅ぶ運命、不吉の運命を、物語の大きな柱にしようとするのである。

〈太白昴星犯合〉記事群は、当代政治批判または後白河批判を

狙いながら、より大きな枠組で、平家の滅亡する運命を暗示する役割を担っている。「帝王鑑戒」としての意味を「物語の展開を予兆する」形で包んでいるのである。また過去の天変の記述と呼応して、〈太白昴星犯合〉が安徳帝の運命と関って記されていることは、天変地妖②④と呼応しながら、「帝王鑑戒」としての天変「記事」の要素をも持っているといえるのである。

## 注

- (1) 私の既発表論文 ①「平家物語と前兆―暗示の二重構造―」（『現代社会文化研究』第33号 二〇〇五年七月） ②「天文異変記事と平家物語」（『現代社会文化研究』第35号 二〇〇六年三月） ③「延慶本平家物語の二つの〈彗星記事〉」（『新潟大学国語国文学会誌』第49号 二〇〇七年四月）
- (2) 拙稿「延慶本平家物語の二つの〈彗星記事〉」（『新潟大学国語国文学会誌』第49号 二〇〇七年四月）は、延慶本に記される二つの〈彗星出現〉について検討した。二つの〈彗星出現〉は、平家物語の重大事件の展開をあらかじめ匂わせるような形、すなわち「前兆」的な役割が与えられながら、その一方で、同時代の帝王の在り方に関わる「鑑戒」としての役割をも与えられていると考察した。
- (3) 牧野和夫は「延慶本『平家物語』が収める「付楊貴妃被失事并付役行者事」は、他諸本の等しく欠いている延慶本独自のものです。延慶

本を考える上で最も注目しなければならない記事である。」と指摘している。（『延慶本『平家物語』の一考察―「諷諭」をめぐる―』「軍記と語り物」一六 一九八〇年三月）

(4) 『山槐記』史料大成 一九三五年『吉記』史料大成 一九三五年）には、養和二年正月一日の記述がないが、『玉葉』（国書刊行会 一九〇七年）によると、養和二年正月一日に節会がなかった。

(5) 延慶本において、楊貴妃の名字は、「楊」「陽」と二通りに使われている。本稿においては、本文引用は原文のままにして、論述の際は「楊」に統一する。

(6) 「大伯」は「太白」と同じ。

(7) 同記述を確認できたのは『玉葉』『養和二年記』（『歴代残闕日記』第十一冊 臨川書店 一九八九年）である。『山槐記』には同記述がない。なお、『百鍊抄』（新訂増補国史大系 一九八一年）寿永元年（養和二年）三月の記事の末に「近日天変甚多」とある。

(8) 『玉葉』同日条（養和二年廿三日）によれば、以前に火星が歳星を犯したことが、最近金星が歳星を侵したことを泰親が語り、火星の変は、治承三年の大乱（治承三年の大政変、法皇幽閉）の前兆であったと記す。

(9) 国立天文台三鷹図書室所蔵の『天文要録』の写本の複写によった。一部欠巻があり、確認できるのは以下のとおりである。

天文要録序、日占第四、月占第五、辰星占第十、角占第十一、房占第十四、尾占第十六、箕占第十七、女占第廿、壁占第廿四、婁占第廿六、昴占第廿八、畢占第廿九、觜占第卅、參占第卅一、鬼占第卅



- 三、七星占第卅五、石内宮占第卅、石内宮占第卅一、石内宮占第卅三、石内宮占第卅四、石内宮占第卅五、耳内宮占第卅八、耳外宮占第卅九、巫内外宮占第五十。
- (10) 「大人」は「大臣」と同じ。
- (11) 『史記』中華書局 一九五九年、『漢書』中華書局 一九六二年、『後漢書』中華書局 一九六五年、『晋書』中華書局 一九七四年。
- (12) 『後漢書』には、「太白」「昴星」それぞれが代表する意味の説明がない。具体的な事例を中心に記され、その中に、「太白昴星犯合」も記されている。後にその記述例に触れる。
- (13) 橋本敬造『中国占星術の世界』は、「太白」が軍事を司るのだと触れている。(八三頁、一三八頁、一四九頁 東方書店 一九九三年)。
- (14) 斉藤国治『国史国文に現れる星の記録の検証』一〇〇〜一三二頁 雄山閣 一九八六年。
- (15) 『日本紀略』新訂増補国史大系 吉川弘文館 一九六五年
- (16) 拙稿「天文異変記事と平家物語」(『現代社会文化研究』第35号 二〇〇六年三月)において、既に述べていたが、『平家物語』の記す範囲の実際の時代には、たかさんの天変が認められ、平忠盛昇殿の長承元年(一一三二)から、正治元年(一一九九)の六代被斬までの六十八年間を、物語を離れて記録類に拠ってみるならば、治承二年の(彗星出現)を含め、彗星出現は計十九回も観察され(『史料綜覧』・卷三、巻四によった)、養和二年の(太白昴星犯合)を含め、惑星現象は八十回もあつた注(14)。
- (17) 『旧唐書』中華書局 一九七五年
- (18) 『新唐書』中華書局 一九七五年
- (19) 『長恨歌傳』陳鴻撰 『楊太真外傳(上下)』史官樂史撰 (『唐宋傳奇集』魯迅 新藝出版社 一九六七年)
- (20) 楊貴妃関係の話を収録している他の軍記ものの『平治物語』『太平記』でも「天変」は出てこない。
- (21) 日本における長恨歌説話の取り入れ方について、最近の研究では、北村昌幸の「長恨歌説話の主題と表現―『太平記』を焦点として―」(『古代中世文学論考 第十三集』新典社 二〇〇五年)がある。いろいろな作品を調査し、平家物語では、物語の諸要素による対照表を示している。延慶本を取り挙げているが、天変については要素としても挙げられていない。また、言及もない。
- (22) 武久堅「延慶本平家物語の楊貴妃譚」(『広島女学院大学国語国文学誌』八 一九七八年一二月) 同氏著『平家物語成立過程考』(桜楓社 一九八六年十月) 一四七頁 によった。
- (23) 注3と同じ。
- (24) 「楊貴妃被失事」記事の後に、「并役行者事」が続く。「并役行者事」記事について、牧野和夫(注3論文)は、「并役行者事」は、単に役行者なる人物に対する(注)ということになり、星犯星という天変と謀反という人事の、いわゆる天地人が相呼応し合うという考えに立脚して役行者をみるのではなく、全体の叙述展開から全く遊離した宗教知識・伝記考証に随しているのである。」と、指摘している。
- (25) 『日本書紀』(新編日本古典文学全集 小学館 一九九六年)
- (26) 生形貴重「『廢帝物語の構想』と対照的に、武久堅は「安徳神話

の構想」を主張する。武久堅は『《安徳神話》の誕生―生成平家物語説論の一環として―』（『日本文芸研究』四八―三 一九九六年十二月）に始まる『安徳神話』の展開（『広島大学日本語教育学科紀要』七 一九九七年三月）「安徳神話の原点」（『日本文芸研究』四九―二 一九九七年九月）の三論考によって、安徳の記事群を分析し、「延慶本平家物語の読み手が、どのように『安徳』の発動する『神話』に繋留されるべくこの物語が構想されてあるか」を述べる。

（27）生形貴重『平家物語』の基層と構造―水の神と物語』六八頁 近代文藝社 一九八四年。

（28）「客星入月中」について、『史記索引』（中国廣播電視出版社 一九八九年）『漢書索引』（中国廣播電視出版社 二〇〇一年）『後漢書索引』（中国廣播電視出版社 二〇〇二年）を通して調べてみたが、見つからなかった。『史記』天官書、『漢書』『後漢書』天文志も確認したが、同記述がなかった。

（29）延慶本巻六の「兵革ノ折ニ秘法共被行事」において、「当世ノ躰ヲ見ニ、平家朝敵ト見ヘタリ」と「平家」を「朝敵」だと明言している記述もあるが、巻七の叙述の流れに従って、私は安徳帝に対するものとして、「朝敵」という形での「逆臣」を考えたい。

（30）「天」は「妖」と同じ。

（31）安徳帝の「受禪ノ日」「御即位ノ日」「御禊ノ日」に、いずれも様々な怪異が起ったことに対し、武久堅は「ここに「安徳」のひめる恐るべき威力、つまり「神話力」の集中的発動がなされており、その威力をつかまえて物語の構想を発酵させた作者の独創である」と指摘する。

（『《安徳神話》の展開』注（26））。

（32）小野は彗星、金星などの七つの天変地異（二つの天文異変、五つの地異）を、物語の構想との関連で論じている。彗星は単に巻三・巻四の伏線となっているのみならず、平家滅亡を視野に入れて、具体的には、安徳天皇を忘まわしき運命を背負った帝として誕生させたと論じた。また、巻六の金星は、平家滅亡を見通したものであり、具体的に「四夷おこる」という形で明示し、巻を追うごとに平家滅亡へと収斂されると指摘している。（『平家物語の構想に関する一試論―天変地異を手がかりに―』『山口国文』第十一号 一九八八年三月）

主指導教員（鈴木孝庸教授）、副指導教員（舩城俊太郎教授・荻美津夫教授）